

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 26 年 9 月 25 日	
所属部局・職	野生動物研究センター・修士課程学生
氏名	松島 慶

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
新潟県妙高高原
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
笹ヶ峰実習 (無雪期)
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 26 年 7 月 22 日 ~ 平成 26 年 7 月 25 日 (4 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
京都大学山岳部・笹ヶ峰ヒュッテ
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
[概要] フィールドで野生動物を研究する上で、その環境を知るということは非常に大切なことである。対象動物が取り巻く環境と複雑な生態圏を築き上げていることから、その土地のことをよく知らなければならないというのはもちろん、調査を行う上で環境を知っていることが生死に関わってくることさえある。それだけでなく、一種の対象動物だけでなく他の動物へ、植物へと、科学者として興味を広げていくきっかけにもなる。 今回の実習は新潟県の妙高高原にある京大山岳部保有の笹ヶ峰ヒュッテに宿泊し、フィールドワークに必要な基礎知識を得るとともに、自然を楽しむことを知ることを目的として、レクチャーとハイキングを行った。
[内容] レクチャーはロープワーク、ビバークの行いかた、地図やコンパスの見方を、実物を用いながら教わり、ハイキングはヒュッテ近辺及び妙高涸沢、そして火打山登山を行なった。 レクチャーは主にもともと山のガイドをされていた、極地研の樋口先生によって行われた。まずロープワークとしていくつかの実用的なロープの結び方を学び、すぐに結べるように何度も練習を繰り返した。これらの結び方は簡素ながら強度があり、日常生活でも役立つようなものである。旅行などにおいてもちょっとしたときに活用できるので、常にかばんの中にロープを持っておくことよいかも教わった。その後のビバークの練習では、簡易テントをロープワークレクチャーで学んだ結び方を用いて立て、実際にロープワークが役に立つところを体験した。 地図やコンパスの見方を知るとは、生死に関わることだ。太陽が見えなかったり、GPS が使用できなくなってしまう状況においてアナログな道具は非常に役立つものであり、しかしながら使用方法を学んでおかなければ十分に活用することができないものだ。初めに実際にコンパスを使って自分が進みたい方向を決定してみるということをテストしたところ、全員が同じ方向を向くことはできなかった。今回の実習のような無雪期では、方角決定の参考にすべきランドマークがたくさん見られるので迷いづらいが、もっとわかりづらい環境では方向を知るとは非常に大切になってくることを学んだ。 こういったレクチャーの内容は、ちょっとしたフィールドワークの際にも役立つことであり、大変有益であったと感じているが、ロープワークなどは忘れてしまいがちなので、忘れないように何度も復習しようと思った。 笹ヶ峰ヒュッテがある場所は自然に囲まれた場所で、到着直後に行った近辺のハイキングではすぐ近くまである牧場・きれいな小川など普段では見ることができないようなものだらけだった。翌日の涸沢ハイクはもう少し本格的なものになり、道具を用いなくても登れるものの、道として整備されていない岩場を登っていった。涸沢にはいくつも水溜りが残っており、滑りやすくなっている場所もあった。また、水溜りにはおたまじゃくしなどの生き物たちもたくさんいた。そういった岩場を登る際には、靴を岩に垂直に押し付けることで摩擦を掛け、滑らないようにするといった技術的なものも学んだ。枝を掴む際には一度引っ張ってみて腐っていないか、枯れていないかを調べてから掴むといったようなことは、こういった登山以外のフィールドワーク時にも大いに役立つことになると思われる。 更に翌日に行われた火打山 (2462m) 登山は、人生で初の 2000m 級の山の登山であった。朝は 6 時に出発し、お昼くらいに山頂に到着することを目標として登山を開始した。1 時間ごとに 10 分間の休憩が入るようなペースを維持するといった、登山の基本を学んだのも初

ると雪が残っているのがちらほら見られ、別世界のようにであった。霧も濃くなり、雨も降り出し嵐のような状況のなか山頂までたどりついたが、周囲の景色はほとんど見る事ができなかった。雨風があまりにひどく、休憩時に山岳部の部員から簡易ビバークの仕方を教わった。やはり、その土地に詳しい人と行動を共にすることで、より実用的で即時的な知識を得ることができると感じた。こういったことは、本などを読んで学習するよりも、現場で自分の目で学ぶという、野生動物研究の基本に通ずる部分を感じた。下山する際には周囲の植物などに注目しながら、登りとほぼ同じくらいの時間をかけ降りて行ったが、疲れもあり満足にすることができなかったのが残念である。また、せっかく前日のレクチャーで地図やコンパスの使い方を学んだにもかかわらず、高度が上がるにつれて確認することも少なくなり、実習としての登山をあまり活用し切れなかったことが悔やまれる。しかしながら、新潟という車で行けるような身近な環境ながら、普段生活する環境とはまったく異なるような世界が広がっており、特に山頂付近は別世界であった。

[感想]

今回の実習は、身近ながらも普段と違う環境から多くのものを学び取ることを目的としていたが、あまりに新鮮な多くのものがあったことから、少し反省の部分が多い実習となった。特に山頂付近の植物相などは、滅多に行くことができないことから、もっとよく見ておけばよかったと感じている。しかし、ロープワークや地図の読み方といった、実際の自分の調査時にも即時に活用できそうなことも多く学ぶことができ、実習として終わらせるのではなく、活かしていきたいと思う。



左：ヒュッテ周りの牧場
中：小川
右：夜になると辺りは真っ暗になる



左：溜沢
中：おたまじゃくし
右：野生動物（シカ？）の食痕



<平

life-science.org

左：朝から霧が出る山の入り口
右：高谷池

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書
(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

6. その他 (特記事項など)